

わが国の矯正臨床における TAT 研究の歴史と動向

齊 藤 文 夫

History and Development of TAT Studies in the Field of Corrections in Japan

Fumio SAITO

要 約

わが国矯正臨床における TAT 研究を，4 期に分けて回顧・展望した。第 1 期（1950 年代から 1969 年まで）においては，TAT がわが国に移入され，TAT に関する研究が始まる。そうした研究の最早期から，犯罪非行臨床での TAT 研究が始められ，犯罪者・非行少年らと健常者との TAT 反応の差異が追究された。第 2 期（1970 年代）においては，ロールシャッハ検査が臨床実務に定着する一方，TAT は，使い勝手の悪い心理検査として，研究者や実務者から敬遠されるようになった。しかし，わが国の犯罪非行臨床では，この時期においても，いくつかの TAT 研究が続けられた。第 3 期（1980 年代）は，TAT 研究が，内外ともに最も低調になった時期である。しかし，わが国の犯罪非行臨床の分野では，地道な実務研究が続けられ，このころ，矯正実務者による最初の TAT 解釈手引きが刊行された。第 4 期（1990 年代）においては，TAT の面白が見直され始め，実務者（主として矯正施設の心理技官ら）による研究が活発化する。殺人犯の心理機制，TAT における性別誤認の問題，1 図における壊れたパイオリン，8 BM 図における冷情性空想，犯罪者や非行少年の自己像・両親像，あるいは対人関係や課題解決様式など，犯罪非行臨床における独自のテーマが追究されるようになった。

キーワード：TAT，文献展望，犯罪，非行

第1節 はじめに

TATは、わが国の犯罪非行臨床において、どのように活用されているのだろうか。また、これまでどのような研究がなされ、どのような知見が得られているのであろうか。本稿は、そうした問題について、関連文献を渉猟しつつ、犯罪非行臨床におけるTAT研究の歴史と動向を概観しようとするものである。

本論に入る前に、若干のまわり道をさせていただき、TATが心理臨床の現場でどのくらい活用されているのかという問題について、ひとことふれておきたい。

TATは、ロールシャッハ検査と並んで、投影法の双璧をなす心理検査であるとされている。どの臨床心理学の教科書を見ても、そのように書かれてある。しかし、わが国の心理臨床の現場では、筆者の知る限り、TATはそれほど多用されている心理検査ではないようである。最近における小川・田辺・伊藤(1997)の調査によれば、さまざまな心理臨床の分野で用いられている性格検査のベスト・スリーは、ロールシャッハ検査、バウム・テスト、SCTの3種であって、次いで、YGPI、HTP、PFスタディ、家族画、風景構成法などが用いられている。TATは上位13位までのランクにも入っていない。ランクに入っていないのであるから、どれくらい利用されているのかは分からないが、めったに用いられていないというのが実情ではないだろうか。

TATを高く評価する山本は、TATがあまり活用されていない現状を嘆いて、「(戸棚に放置された)TAT図版のケースには、うっすらとほりがついている」、「(TATはそれほどに)誇り高きテストである」と述べている(山本, 1992, p. 2)。

犯罪非行臨床の分野で、TATはどれほど用いられているのであろうか。正確なことは分からない。しかし、筆者が勤務したいくつかの矯正施設では、通常のテスト・バッテリーに組み込まれているのは、SCT、バウム・テスト、MJPI(法務省式人格目録)、ソンディ・テスト(1回法)、内田クレベリン検査、PFスタディなどであった。矯正施設において、TATは、ロールシャッハ検査とともに、いわゆる精密鑑別で用いるとされる心理検査である。しかし、精密鑑別においても、選択される投影法はほとんどの場合、ロールシャッハ検査であるのが実情である。これまで一度もTATを使用したことがないというベテランの家庭裁判所調査官や矯正施設心理技官を、筆者は何人も知っている。そうしたことから推測して、TATは、犯罪非行臨床でも、それほど用いられていないとみてまちがいないだろう。

TATという心理検査は、施行に手間ひまがかかり、しかも標準的な解釈・分析の方式が確立していない。そうした使い勝手の悪い心理検査をあえて使用する実務者は、それほど多くはないとみてよさそうである。

TAT は心理臨床の現場でそれほど盛んに用いられているということはなさそうであると述べた。そうした現実を踏まえて、本稿では、わが国の犯罪非行臨床の実務現場における TAT に関するこれまでの刊行文献を渉猟し、過去 50 年近くの研究につき、その研究成果や研究動向を概観することを目的としたい。

ここでは、わが国における研究だけに限定したい。諸外国における犯罪非行臨床での TAT 研究もあるのかもしれない。しかし、それらを丹念に収集し、要約・紹介することは、筆者の手に余る課題である。

ちなみに、アメリカを中心とする諸外国における TAT 研究の文献を、Psychological Abstract 誌などを手がかりに筆者が検索したかぎりでは、犯罪非行分野での TAT 研究はごく少ない。最も TAT 研究が盛んであった 1950 年代から 60 年代における文献を精査した安香・佐藤（1962）は、「今日まで、内外でなされてきた TAT のおびただしい数にのぼる諸研究の中に、非行少年や犯罪者に関するものは意外に少ない」と嘆いている。最近における実情も、ほぼ同様ではないかと筆者は思う。諸外国における臨床の現場で、TAT はある程度は活用されているのかもしれない。しかし、実務者らが TAT を用いた研究を行い、その成果を論文として公表することはごく少ないというのが実情であろうかと思う。おそらく、裁判所や矯正施設といった現場に勤務する心理実務者が TAT を活用しつつ研究を重ね、その成果を学会等において発表しているのは、わが国特有ともいえる現象ではないかと思われる。

本稿においては、研究動向の展望を年代順に記述することとしたい。第 1 期（1950 年代から 1969 年まで）、第 2 期（1970 年代）、第 3 期（1980 年代）、第 4 期（1990 年代以降）の 4 期に分けて、論述していく。

第 2 節 1950 年代から 60 年代末までの動向

TAT 図版がハーバード大学から出版されたのは 1943 年のことであった。以来、アメリカにおいては、TAT はかなり広範に用いられているとされている（Piotrowski, Sherry and Keller, 1985）。TAT の誕生以後、1940 年代後半から 1960 年代にかけて、アメリカではきわめて活発に TAT の研究が行われた。TAT は「米国人にとっては誇り高き国産品」（山本, 1992, p. 12）である。その TAT を、スイス生まれのロールシャッハ・テストに対抗しうる有力な投影技法として育てたいというアメリカ人研究者らの強い意気込みもあって、精力的な TAT 研究が推進されたのであろう。

この時期における研究を展望した代表的な文献として、臨床心理学雑誌（Journal of Clinical Psychology）の別冊モノグラフ「TAT：臨床家と研究者のための解釈辞典」（Lindzey, Bradford, Tejessy and Davids, 1959）がある。TAT を特集する別冊モノグラフが刊行された

ことから、当時のアメリカにおける研究者らの意気込みがうかがわれる。このモノグラフにおいては、177点のTAT研究文献が収集・要約されている。また、その後、1965年に出版された「臨床心理学ハンドブック」の「TAT技法」の章によれば、実に610点もの研究業績が累積されている(Harrison, 1965)。

アメリカにおけるこうしたTAT研究の隆盛に呼応して、わが国においては、1950年代初頭から、TATの臨床的適用に関する研究が始められた。大阪大学の和田種久らのグループや名古屋大学の丸井文男らのグループ、あるいは家庭裁判所調査官の山口 透が、TATを精神患者や非行少年らに施行した。これらの研究が、わが国におけるTAT研究のさきがけであるといわれる(藤戸, 1959)。また、1952年ころには、文部省科学研究助成金を得て、早稲田大学の戸川行男を中心とするTAT研究グループが発足している。

TATの日本版が作成され、試行されたのもこの時期であった。1953年には、戸川を首班とする早稲田大学グループが早大版TATを世に問い(戸川, 1953)、1958年には、精神医学研究所に所属する慶応大学グループが精研版TATを出版している(佐野・横田, 1958)。ちなみに、横田は、東京少年鑑別所で心理技官として勤務していた経歴がある。

1960年代に入ると、わが国においても、佐治(1963)、木村(1964)、山本(1966)、小嶋(1969)らによって、次々にTATに関する入門的な概説書や論文が刊行された。こうした文献を手がかりに犯罪非行臨床の分野でもTATを用いてみようとする機運が高まった。

犯罪・非行分野でのまとまった研究の最初期のものとしては、戸川行男らが監修し1959年に出版された「心理診断法双書：TAT」(戸川ほか, 1959)に登載された藤戸せつや丸井文男らの論文がある。これらの論文が、わが国の犯罪非行分野における研究の嚆矢といってよいだろう。

大阪大学の藤戸(1959)は、少年鑑別所に収容された男子非行少年30名と神経症患者及び健常者らにTATを施行し、非行少年の特徴として、次の諸点を見出した。(1)反応の所要時間が短い；(2)空想生産量も少ない；(3)物語の構成(筋)が単純である；(4)犯罪と関係する空想物語が多い；(5)否定的な自己像が出現しやすい；(6)暖かい親子関係が語られることが少ない；(7)暖かい異性関係が語られることが少ない；(8)導入人物が少ない(特に1図において両親や教師といった権威的人物が導入されない)；(9)権威者としての両親像が語られない；(10)物語の結末は突然のハッピーエンドで終わることが多い；(11)方言の使用が多い。ちなみに、これらの特徴は、筆者の臨床経験からいえば、現今の非行少年らにもほぼ共通して見られるものである。

名古屋大学の丸井・関根・近藤(1959)は、アメリカのStone(1956)やScodel and Lipetz(1957)による犯罪者のTAT研究を踏まえ、わが国の成人犯罪者32名と健常者らのTATを比較検討した結果、犯罪者のTATにおいては、健常者のTATと比べて、(1)殺人の物語など、強い攻撃性を表出する空想が多い；(2)衝動統制の弱さを示唆する反応が多い；(3)概して不安水準が低い；(4)課題達成を阻む障壁に対する不安が低い；(5)にもかかわらず、主人公が意欲的・目

的行動をとることが少なく；(6) 問題解決様式が消極的，受け身的である，といった特徴が見られるとしている。

犯罪者とはいえないのかも知れないが，科学警察研究所の貝沼（1960, 1961）は，タクシー運転手で交通事故を繰り返すいわゆる事故頻発者に TAT を施行し，交通事故を反復する運転者の性格特性として，(1) 自己の劣性を感じ，悩み・困惑・躊躇などを感じやすい神経症的傾向；(2) 自己中心性；(3) 孤立的・排他的な対人関係；(4) 不満や葛藤を積極的・自発的に解決しない；(5) 解決課題に対して回避的である，といった諸特性が見出されたとしている。

家庭裁判所調査官の磯貝（1961）は，少年鑑別所に収容された 30 名の男子非行少年と同数の健常少年に名大版 TAT を施行し，非行少年の特徴として，(1) 身体的攻撃に関する空想が多い；(2) 抑圧された攻撃性・衝動性がうかがわれる；(3) 内的な葛藤の物語が少ない（健常少年では，葛藤の物語が多い）；(4) 冷たく，反発的な親子関係が語られる；(5) 特に父親との関係が不調であることがうかがわれる；(6) 物語の結末として，突然に幸福や成功がもたらされるとするものが多い（健常少年の場合は，現実的検討がなされるとともに，物語の結末を不定とするものが多い）；(7) 犯罪の主題も多いが，後悔・反省・贖罪の主題も多い，という特徴を指摘する。

家庭裁判所調査官の藤田（1961）は，女子少年院に収容された女子非行少年 12 名に TAT を施行した結果，彼女らが強い不安を抑圧していることを見出すとともに，彼女らの対人態度が，

- (1) 依存型（自己の無力を強調し，他者に依存する）
- (2) 攻撃型（無力感や依存感を抑圧し，敵意に満ちた外界に立ち向かう）
- (3) 離反型（依存も敵意も表出せず，対人関係を回避して自己の内にこもる）

の 3 類型に区分できるとした。非行との関連として，依存型は性非行の被害体験や同棲経験を有する者が多く，攻撃型は窃盗を働く者が多く，また離反型は風俗事犯や薬物事犯に結びつきやすいとしている。

安香・佐藤（1962）は，この時期までの内外の文献を渉猟し「TAT のおびただしい数にのぼる諸研究の中には，非行少年や犯罪者に関するものは意外に少ない」ことを見出すとともに，独自の調査研究を行った。その調査においては，非行少年（初等少年院在院者 120 名）と健常少年（中学 2 年生 73 名）の TAT が比較され，その結果，反応時間，物語の長さ，投影度，認知の歪曲・省略，物語構成といった形式的な項目については，（非行群は健常群よりも，物語が短いことを除いて）両群間に差異は認められなかった。ただし，反応の内容を分析すると，いくつかの差異が見出された。例えば，4 図において，非行群は「N 拒否」と「P 親和」が多く，非行少年は親和的な対人関係を拒否し，その場から逃れようとする物語を語りやすい。8 BM 図において，健常群では「N 養育」が多いのに対し，非行群では「N 攻撃」と「P 攻撃」が多い。つまり，健常少年は相手を助ける物語を作るのに対し，非行少年は，攻撃され，反撃するといった物語になりやすい。こうした知見から，かれらは「TAT は（物語の内容分析にまで踏み込めば），非行性の予測ということに関して，かなりの程度以上に有効なものであるといえるようである」と結

論づけている。

精神科医の小田（1963）は、早大版 TAT を用いて、刑務所に収容された多種方向犯罪者（短期受刑者 70 名、長期受刑者 45 名）の TAT と健常者や単一方向（窃盗）累犯者の TAT とを比較・検討し、次のような知見を報告する。(1) いわゆる欲求・圧力分析では、犯罪者と健常者の間に大差はない；(2) 多種方向犯罪者の物語は、時間的展望に乏しく；(3) 殺人物語の出現率が高く；(4) しかも、殺人行為が中断されずに、完遂されとする反応が多く；(5) かつ、健常者では全く見られない近親相姦物語がしばしば出現する。ちなみに、これらの知見は、矯正施設における筆者の臨床経験からも、ほぼ首肯されるものである。

このころ、家庭裁判所調査官である中村（1965）は、離婚調停など夫婦問題に関する家事事件で、当事者らの内面心理を理解する手がかりとして TAT が有用であることを報告している。これは、犯罪非行とは関係がないが、民事司法の実務でも TAT が有用な心理検査であることを示唆している点で意義があろう。

矯正施設の心理技官である安香・坪内（1968, 1969 a, 1969 b）は、精神分裂病者、非行少年、健常な 8 歳児らに TAT を施行し、TAT の反応特徴を比較・検討した。その結果、図版認知のパターン、記述反応の特徴、物語における人間関係優位や感情優位、明細化、導入人物の有無などから、人格の病理的特徴や発達段階がある程度鑑別判定できるとした。これらの研究において、安香・坪内は、TAT 図版に描かれた各部分を、ロールシャッハ図版における反応領域の区分に準じて、普通大部分（D）、普通小部分（d）、特殊小部分（Dd）と類別した上で、被験者の図版認知パターンの特徴（歪曲、見落とし、細部固執など）を調べている。こうした工夫は、TAT 図版の認知パターンをある程度客観的に分析し、比較検討するためのする方法として注目される。安香と坪内は、こうした基礎的な調査研究を踏まえて、その後の矯正臨床における TAT 研究をリードしていく。

表 1 わが国の犯罪非行臨床における TAT 研究文献（1950－1969 年）

研 究 者	年 次	論 文 題 目
藤戸	1959	非行少年
丸井・関根・近藤	1959	犯罪者
貝沼	1960	事故運転者の臨床心理学的考察, I
貝沼	1961	事故運転者の臨床心理学的考察, II
磯貝	1961	非行少年の TAT 反応の量的考察
藤田	1961	TAT に現れた女子非行少年の態度
安香・佐藤	1962	非行少年の早期予測に関する研究: TAT による研究
小田	1963	TAT (絵画統覚検査) による多種方向犯罪者の研究 (1)
中村	1965	いわゆる「性格不一致」夫婦への取り組み方: TAT かかわり分析を手懸かりとして
安香・坪内	1968	TAT の分析法と解釈基準の検討 一刺激認知と物語構成からみた一

第3節 1970年代における動向

1960年代から70年代にかけて、ロールシャッハ・テストにおいては、ベックやクロッパーらの尽力によって、さまざまな反応を記号化・数量化する方式（サイン・アプローチ）が確立するとともに、心理診断用具としての有用性が飛躍的に高まった。人格査定のための投影法としては、まずロールシャッハ・テストが選択されるようになった。

TATにおいても、1950年代ころから1970年代ころまで、反応を分類し、数量化するための研究（いわゆるノーマティブ・スタディ）が盛んに行われた（代表的なものとして、Eron, 1950; Murstein, 1972）。しかし、TATの場合、多くの研究者の努力にもかかわらず、客観的・体系的な数量化や解釈手続きの方式はついに確立することはなかった。臨床場面での実用性という点において、「アメリカ生まれのTATは、スイス生まれのロールシャッハに大きく水をあけられてしまった」（齊藤文, 1996b）。

また、このころ、アメリカ精神分析のメッカであるメニンガー・クリニックで臨床経験を積んだRapaportやHoltらが、TAT反応は無意識の心的内容というよりもむしろ知的な産物ではないか、一次過程的というよりも二次過程的な思考の産物ではないかといった批判的な考え方を打ち出し、そうした批判がかなり広範に受け入れられた。そうしたことから、それまでの素朴なTAT仮説に対する疑問が高まり、投影法としてのTATの基本的性格について、さまざまな混乱が生じた（安香, 1990, pp.122-123）。

かくして、アメリカにおいては、1970年代以降、実務者や研究者のTATに対する熱意は冷え込んでいった。1970年から1983年にかけてのTAT研究の動向を展望したPolyson, Norris and Ott（1985）は、この時期におけるTAT研究が質量ともにかつての勢いを失ったことを見出し、この時期をTAT研究の「退潮期（decline）」と呼んでいる（Bellak, 1993）。

ここで、やや脇道にそれるが、筆者は1978年から1979年にかけてアメリカに留学した。そして、アメリカの心理学者から、TAT研究が衰退した理由のひとつとして、アフリカ系アメリカ人らによる公民権運動の著しい伸張の影響があるということを聞かされた。TATの図版に描かれた人物のほとんどは中産階級と見られる白人であり、こうした図版を文化的・人種的に異なるマイノリティに安易に適用することに対する批判が強まったという。ちなみに、このころ、アフリカ系アメリカ人向けのTAT図版を新たに検討する研究者らもいたが（例えば、Bailey and Green, 1977）、この種の修正TAT図版は広く普及するに至らなかった。

1970年代、アメリカにおけるTAT研究は一時の勢いを失ったと述べた。しかし、わが国の犯罪非行臨床の分野では、主として矯正施設や家庭裁判所の実務者らによる地道な研究が続いていく。

1972年、「矯正教育」誌第200号出版を記念して、当時の大阪矯正管内の心理技官らの手によって記念論文集「矯正のためのテストと統計」が出版された（市川編，1972）。この論文集において、京都少年鑑別所の心理技官であった坪内（1972）は、矯正臨床の現場におけるTATの施行法、解釈法、レポートの書き方などを分かりやすく論じている。これは、矯正実務者が執筆した手引き書としては最初のものといっていよう。坪内は、その後も矯正臨床でのTAT研究を重ね、その成果は12年後に「TATアナリシス」と題する著作として結実する。

同じ年、家庭裁判所調査官の笠井ほか（1972）は、殺人事件を起こした非行少年4例のTATプロトコルを分析し、かれらのTAT物語の特徴として、(1) 暖かい対人交流に欠ける；(2) 外界を脅威としてとらえる；(3) 性的（性別）同一性や自我（自己）同一性が不明確で、混乱している；(4) 主人公がアウトロウ的、落伍者の人物である；(5) 主人公が幼児的な万能感の保持者である；(6) 主人公が孤独である；(6) 殺人や自殺の物語が頻発する、といった諸特徴をもつことを報告している。

非行少年に対する面接調査の経験を踏まえ、家庭裁判所調査官の逆瀬川（1973）は、TATは心理検査としては使いにくいものの、調査面接を深めていくための手がかりとして役立つことを指摘し、もっと自由なTATの使い方を工夫すべきであることを提唱している。かれは「TAT物語は、それを創った人についての豊富な知見を内包している」とした上で、「現場においては、TATをテストとしてよりは、むしろTAT図版を媒介として普通の面接へと発展させて有効なことが多い」と述べている。内省的な構えが乏しく、自分自身を客観化して語ることがむづかしい非行少年や犯罪者に対し、面接を深めつつ焦点づけるための手がかりとしてTATを利用することは、矯正の実務者もしばしばしていることである。TATのこうした活用の仕方については、さらに考究すべきであろうと思われるが、論文化されたものはほとんどない。

少年鑑別所の心理技官である伊井と小川（伊井・小川，1975；小川・伊井，1975）は、施設収容歴が長い（養護施設、教護院、少年院での収容期間が通算4年以上の）男子非行少年らにTATを施行し、施設生活の長い非行少年のTATの特徴として、(1) 空想物語の分量（反応量）が少ない；(2) 記述的反応が多い；(3) 情緒表現が乏しい；(4) 淋しい、つまらないなどの否定的な情調が表出される；(5) 登場人物が明細化されない；(6) 対人関係やその場の状況が明細化されない；(7) ストーリーが単純である、といった諸点を指摘した。これらの諸特徴は、施設生活の長い非行少年らの社会経験の乏しさや対人経験の偏狭さ、空疎な内面世界や時間的展望の欠如を示唆するものといえよう。

刑務所の心理技官である坪内・齊藤文・安香（坪内・齊藤文・安香，1975；齊藤文・坪内・安香，1975）は、人格的な偏倚が大きい成人犯罪者20名のTAT反応を収集し、特異な犯罪者に見られるTAT図版の認知パターンの特徴を、歪曲・省略（見落とし）・細部固執と3分類した上で、次のような知見を報告する。(1) 認知歪曲が多い事例は特異な外界把握の様式を持っており、かれらは極端な気分易変、破壊衝動、自殺衝動などの逸脱的行動傾向を示す；(2) 省略

(見落とし) が多い事例は粗雑な外界把握様式を持っており、そうした粗雑な認知様式を示す犯罪者には知的に劣る者、慢性アルコール依存者、ドヤ暮らしの長い者などが含まれる；(3) 細部への固執は過敏性、被害感、傷つきやすさのサインであり、放火や心中殺人などの特異な犯罪者に見られる。

この研究を踏まえ、齊藤文(1979)は、特異な殺人犯人(母と息子を殺害)の TAT 事例を詳細に検討した。かれは、この事例の TAT 反応の特徴として、(1) 認知様式における顕著な細部固執；(2) 三角関係的主題の反復；(3) 死と攻撃(破壊)の主題の反復；(4) タテマエの自己と本音の自己との対立・葛藤；(5) 自我同一性の危うさ、などを指摘する。これらの TAT 所見を手がかりに、齊藤文は、この特異な殺人犯人における人格特性と犯行との関連を考察するとともに、受刑期間中の処遇上の留意点などにも触れている。この事例報告は、刑務所での心理臨床においても、TAT から得られる知見が役立つことを示唆している。

坪内(1979)は、女性犯罪者の心の世界を TAT によって解読しようと試みた。彼女は「犯罪とは危機に陥った人がその苦しい緊張から自己を解き放つ行動である」との観点から、女性のライフ・サイクルにおける危機(特に、中年期危機)と犯罪との関連を、TAT を用いて考察した。坪内は、独特の鋭い感性によって女性犯罪者の TAT 反応を読み込み、彼女らの TAT を、

- (1) 恨みのドラキュラ型(ドラキュラ、狂女、化け物などが登場するもの)
- (2) 歪曲自己像型(せむし、盲目、小児マヒなどの身障者が登場するもの)
- (3) 分離・喪失不安型(分離不安や喪失不安が強かうかがわれるもの)
- (4) 外界崩壊・自己破滅型(山崩れや溺死など、自己消滅的・自己破壊的な危機状況が語られるもの)
- (5) ニヒル型(白々しい虚無感が強かうかがわれるもの)
- (6) 分類不能型

などと分類した。その上で、ライフ・サイクルにおける中年期危機に直面した女性たちの心性と犯罪行動との関連を解き明かし、TAT が女性犯罪者の心理力動の理解にきわめて有用な検査であることを示した。彼女はまた、(1) 早発累犯の女性犯罪者においてはドラキュラ型や歪曲自己像型が多いのに対し；(2) 中年期以降の遅発初犯の女性犯罪者においては、健康な自己像や望ましい母親像が語られることが多く；(3) かつ遅発初犯の犯罪者においては、自己崩壊感や死の不安が強く投影される、ことなどを見出している。

このころまで、TAT は、どちらかといえば家庭裁判所や少年鑑別所において用いられてきた。しかし、上記の齊藤文論文や坪内論文は、TAT が刑務所臨床におけるケース理解にも役立つことを示唆している。

年次的にはやや前後するが、家庭裁判所調査官である森(1976)と矯正施設の心理技官である安香(1976)は、それぞれの実務現場での体験に基づき、かなり詳細な TAT の事例分析を公表している。森(1976)は、少年時代から幼女に対する強制わいせつや強姦を反復した 24 歳の性

表2 わが国の犯罪非行臨床における TAT 研究文献 (1970 - 1979 年)

研究者	年次	論文題目
坪内	1972	矯正のためのテストと統計: TAT
笠井ほか	1972	TAT 分析からみた罪種別非行少年の内的世界の比較研究: 殺人少年
逆瀬川	1973	非行少年の対する TAT の適用
我妻	1973	非行少年の事例研究: 臨床診断の理論と実際
伊井・小川	1975	TAT からみた長期施設収容少年の自我同一性, その 1
小川・伊井	1975	TAT からみた長期施設収容少年の自我同一性, その 2
坪内・齊藤文・安香	1975	TAT による特殊犯罪者 (病的な人格反応である犯罪) の研究, その I
齊藤文・坪内・安香	1975	TAT による特殊犯罪者 (病的な人格反応である犯罪) の研究, その II
森	1976	吉尾ケース: 少女に強姦をくり返した加害者の心の軌跡
安香	1976	空想の分析 —TAT 解釈のプロセスをめぐって—
坪内	1979	女性が犯罪に陥る心理的危機の分析 —特に中年期の危機を中心として TAT を用いた分析—
齊藤文	1979	ある殺人犯の TAT 事例

犯罪者の TAT を吟味した結果, 強い愛情欲求不満, 親に対する敵意と依存, マゾヒズム的な受罰願望などが見出されたとしている。

安香 (1976) は, 非行少年 2 事例の TAT を掲げ, それらのプロトコール分析を通して TAT 解釈の進め方を論じている。かれは, 事例検討を踏まえ, TAT 解釈の要諦を次のように要約している。

- (1) 各図版の刺激特性を熟知し, 「ふつうの反応」をよく承知しておく。
- (2) 日常場面に近い図版と非現実的な図版での反応の差異に注目する。
- (3) 繰り返して語られる主題を重視する。
- (4) TAT 反応は, 図版を「引き金」として賦活された被験者の内的なものに対する反応でもある。
- (5) 解釈にあたっては, 断片的所見の積み重ねでなく, それらを相互連関的に統合することが重要である。

なお, このころ, 我妻 (1973) もまた, 非行少年の事例研究において TAT を活用している。氏原 (1980) が指摘するように, TAT の解釈について論議するためには, 「具体的な解釈例に基づいて議論せぬ限り, ナンセンスに近い。しかし, ……TAT 解釈について公表されたものは, わが国にはそれほど多くない。」鈴木 (1986) もまた, 事例研究の意義を強調し, 具体的な事例を踏まえて解釈技法を洗練すべきであるとしている。犯罪非行臨床では, 比較的早い時期から具体的な事例研究が公表されており, そうした具体例に基づいて解釈技法が模索されてきた。

第4節 1980年代における動向

1970年代から1980年代前半にかけての時期は, アメリカにおける TAT 研究が一時の勢いを失い, 衰退した時期であった。それに呼応して, わが国にあって TAT に対する研究者や実務

者の関心は薄れていった。このころの状況は、「実際には（TAT が）臨床場面で用いられることは、ロールシャッハ・テストに比べたらずっと少ない」（安香，1990，p.121）というものであったし、また「TAT についての研究も減少し、……TAT を一度も使用したことがない人も少なくないだろう……」（鈴木，1991，p.203）といった状況であった。

この時期はまた、ロジャースの唱える来談者中心カウンセリングが一世を風靡し、わが国の心理臨床の現場でもいわゆるカウンセリング・マインドが称揚された時期でもあった。それに伴い、臨床場面でも「共感的な理解」が重視され、安易に心理検査を施行し、レッテル貼りの心理診断に対する批判や疑問が高まった。そうした一般的な趨勢もあって、わが国における TAT 研究はやや低調となっていった。このころのことを評して、山本（1992，p.12）は「TAT は、一度死んだ」とも述べている。

しかし、犯罪非行の分野では、TAT は死に絶えることなく、いくつかの研究業績が積み重ねられていった。

家庭裁判所調査官の郷古（1980 a, 1980 b）は、調査官としての実務経験を踏まえ、TAT の施行法と解釈法を概説する。この論文において、かれは「（TAT の）解釈のために、どうしてもある程度数量化され、客観的である基準を作ることが必要である」として、ロールシャッハ・テストにおける BRS にならい、「TAT 採点表（チェック・リスト）」を提示している。このチェック・リストでは、例えば、初発反応時間（RT）について、

(1) 著しい遅い（2 分以上）：

全図版……………	4	半数以上……………	3
5 ないし 6 枚……	2	4 枚以内……………	1

(2) 著しく早い（5 秒以内）：

全図版……………	4	半数以上……………	3
5 ないし 6 枚……	2	4 枚以内……………	1

(3) 図版による遅速の差が大きい…………… 1

などと数量化し、また例えば、自己の内面の欲求や衝動について、

(1) 欲求・衝動を主人公に託する：

5 ないし 6 枚……	+ 5	3 ないし 4 枚……	+ 3
1 ないし 2 枚……	+ 2		

(2) 欲求・衝動を主人公以外に託する：

半数以上……………	+ 4	5 ないし 6 枚……	+ 3
3 ないし 4 枚……	+ 2	1 ないし 2 枚……	+ 1

などと数量化する。かれは、こうしたチェック・リストに基づき、健常者、精神障害者、非行少年ら 94 名の TAT を数量化したところ、精神分裂病や境界例が最も低得点、正常者が最も高得

点であり、非行少年らはほぼ両者の中間ないしやや境界例に近い得点圏に入ることを見出した。郷古はこの論文で「(あえて) 形式的な TAT の診断的使用を意識的に強調し、それを貫いた」と述べている。かれは、こうしたチェック・リストによる数量化の研究をそれ以上深めることはなかったようであるが、こうした形式分析の研究は貴重なものであり、今後さらに考究すべき分野であろうと思われる。ただし、郷古自身は「徹底的な事例研究も、たしかに必要な不可欠である」とも述べている。TAT はその性質上、数量化や客観化には限界もあらうと思われ、やはり事例研究の集積を通して、個別の事例にふさわしい解釈を模索していくことが基本ではあろう。

家庭裁判所調査官の沢井ほか(1980)は、暴走族に所属する男子及び女子の非行少年各3例ずつの TAT を事例研究的に検討し、かれらにおいては、(1) 無責任・過干渉・禁圧的な父親像を抱いている；(2) 攻撃・憎悪・愛情飢餓などの物語が語られる；(3) 母子間の基本的な愛情・信頼関係を欠いたまま育ったと思われる；(4) 孤独で淋しい情調が伴う；(5) 幼児的・退行的自己イメージが表出される、ことを見出した。沢井ほかは、これらの知見から、非行少年にあっては男性性・女性性が形成不全であり、自己愛段階から異性愛段階への移行が困難となっていることを論じている。

藤田(1984)は、非行少年5例の TAT を手がかりとして、非行少年における母子関係の病理を研究した。かれは、阿闍世物語における「未生怨」やユング心理学における「グレート・マザー」をキーワードとして非行少年の TAT を読み解いた結果、かれらが「望まれない子ども」として生まれ、かつ幼児期において不遇な母子関係を体験していることが推測されたとしている。

独自の視点から TAT の反応類型を考究している鈴木(1998)は、精神病院に入院した17歳のシンナー乱用少年の TAT を、健常者の反応類型と比較しつつ解釈した事例を報告している。鈴木は、シンナー乱用少年の TAT 反応から、生き生きとした感情の欠如、抑うつ傾向、無力感、潜在する希死念慮、男性性の未発達などの人格特性が見出されたとし、そうした問題点と薬物乱用との関連を考察している。

さて、1980年代中期以降、矯正臨床の実務者らによって、独自の研究テーマな模索され始めた。それらは、次のような研究である。

少年鑑別所の実務者である藤掛・荒井(1987)は、男子非行少年105名の TAT 資料に基づき、6 BM 図、12 M 図、13 B 図においては、非行少年の多くに共通して見られる「典型反応」とでも呼ぶべき頻出する主題があることを指摘する。それらを要約すると次のとおりである。

(1) 6 BM 図の典型反応とその解釈：

(a) 母との再会：現実の母子関係は不良であり、願望としての母子の出会いが語られていると解釈される。(b) 父の死：父の存在感の希薄さを示唆すると考えられ、実際の父親も病弱であったり、家庭から蒸発していたり、経済的に無力であったり、現実には死去していることもある。(c) 母との別離：実際に保護領域から自立していることは少なく、むしろ過干渉的な母親で

あることが多い。自立・分離を願望しながら、現実には自立へ向けての行動がとれないことを反映する空想と考えられる。

(2) 12 M 図の典型反応とその解釈：

(a) 父が息子に催眠術：親の権威のない家庭で、放任され、わがまま勝手に育っている。対人場面では、干渉されることを嫌い、支配・被支配という力の関係にとられる。(b) 父が息子の寝顔に満足：実際の父親には前科や酒乱入院歴などがあり、父・息子の接触が乏しい。父親に対する依存心、被受容・被援助願望がある。(c) 父が魔術で病気を治す：実際には幼児期に父母が離婚するなどして、父の存在が薄く、父を理想化している。家庭内での葛藤を自覚できず、非現実的な父からの援助を願望している。

(3) 13 B 図の典型反応とその解釈：

(a) 仲間はずれ：放任されているが、家庭内では深刻な葛藤は少ない。非行は、不良交遊からの感染型非行であり、シンナー乱用、暴走行為などである。(b) 親がおらず、一人で悩む：劣悪な家庭環境のサインであり、欠損家庭・崩壊家庭で育っている少年に見られる。

稲森・小林（1989）は、TAT 図版に登場するさまざまな人物のうち、父母のイメージや自己イメージに結びつきやすいものを探ることを目的として、少年鑑別所に収容された非行少年（男子 61 名、女子 21 名）に TAT 図版を提示し、母親イメージ・父親イメージ・自己イメージと思われる図版中の人物を回答させた。その結果、

(1) 母親イメージは、10 図左・10 図右（男子）；7 GF 図左・6 GF 図左（女子）

(2) 父親イメージは、2 図中央・10 図左（男子）；7 GF 図左（女子）

(3) 自己イメージは、2 図中央・10 図左（男子）；4 図右・10 図右（女子）

の登場人物に結びつきやすいことが見出されたとし、また、5 図においても自己イメージを導入した空想が生じやすい（男女とも）としている。

齊藤俊・佐藤（1989）は、少年刑務所で受刑中の男子犯罪者 2 例に 8 週間の個別カウンセリングを実施し、その前後での TAT 反応の変化を報告している。それによれば、カウンセリング実施前においては、家族関係の物語で、圧力への服従や拒否される不安が語られたが、カウンセリング実施後には、建設的な課題解決を図ろうとする動きや家族との親和が語られるようになったという。また、自己イメージに関しても、カウンセリング前には依存的で無力感が強かったが、カウンセリング後には、主体的・建設的に動こうとする物語が語られるようになったという。こうした知見から、矯正施設における集中的な面接指導による内面の変化を測定するために、TAT が有用であると論じられている。

1960 年代後半から矯正臨床の現場で精力的に TAT 研究を続けてきた坪内（1984）は、彼女の研究の集大成を 1984 年に「TAT アナリシス」と題して出版した。本書は、彼女の豊富な TAT 体験を踏まえ、TAT 図版の 1 枚ごとに、図版の刺激特性や解釈の進め方を詳述している点が特徴である。具体的な解釈例として、離人症や放火犯の TAT 事例が付されている。この著

表3 わが国の犯罪非行臨床における TAT 研究文献 (1980-1989 年)

研 究 者	年 次	論 文 題 目
郷古	1980 a	心理診断の技法: TAT の施行と解釈の技法, 第1部
郷古	1980 b	心理診断の技法: TAT の施行と解釈の技法, 第2部
沢井ほか	1980	非行少年における男性性・女性性についての考察
藤田	1984	非行少年における母子病理 —TAT でとらえたその諸相—
坪内	1984	TAT アナリシス
藤掛・荒井	1987	TAT による非行少年の家族認知の分析
鈴木	1988	TAT 解釈の一例 (1) —シンナー乱用青年の事例—
稲森・小林	1989	TAT の図版特性に関する研究
斉藤俊・佐藤	1989	TAT からとらえる適応力の変化について: 非行少年を対象として
村瀬	1989	TAT 技法指導

作は、今日にいたるまで、矯正実務者にとっての教科書として活用されている。

最後に、家庭裁判所の家事事件における TAT の活用について、村瀬 (1989) は、女性の離婚申立て事例を素材として、いくつかの留意点を懇切に述べている。これは、家裁調査官を対象とした講義の筆記記録であるが、村瀬の所論の要点をまとめると、次のようになる。

- (1) 家事事件における調停機能の一助として、TAT から得られた所見を対象者に伝える際には、相手にふさわしいことばで、かつ状況に見合ったように伝えることがたいせつである。
- (2) そうした作業は、対象者からよりいっそう正確な情報を得るためにも有益である。
- (3) TAT はロールシャッハよりも、被験者の内面を刺激し、思考や感情を活性化する効果がある。
- (4) 時には、TAT は内省を深める契機にもなる。
- (5) TAT 反応は、必ずしもその人の現実ではなく、願望が語られることも多い。解釈にあたっては、そのことに留意すべきである。

村瀬が指摘するこれらの諸点は、家事事件だけでなく、臨床のさまざまな場面で TAT を手がかりに面接調査を進める際にも重要なことであると思われる。

第5節 1990年代における動向

1980年代の後半から、再び TAT は脚光を浴び始める。CAT と SAT の創案者であり、数十年にわたり TAT の教科書を改訂し続けている Bellak は、1980年代後半から1990年代にかけての時期を、TAT の「再開花 (second blooming)」(Bellak, 1993, p. 372) と呼んでいる。これは、アメリカ以外の諸国においても TAT が研究され始めた状況を評して「再開花」と呼んだようであるが、アメリカにおいても、1990年代以降、TAT 研究は再び花開いてきたように見受けられる。例えば、相次いで新しい TAT の研究書が、Teglasi (1993) や Cramer (1996) によって刊行され、TAT への関心が再び高まってきたことをうかがわせる。これらの新しい研究

書にあっては、「物語法 (story telling)」ということばが用いられており、自由に「物語を語ってもらふ」という点にこそ TAT の独自性があるということがあらためて強調されている。また、客観的・形式分析的なアプローチよりも内容分析が重視されている点が特徴的である。

長年にわたって独自の TAT 解釈法を考究してきた Dana も、1996 年の著作で「本質的には (essentially)、TAT の解釈は直感法による (intuitive) ほかになく、それは、創造的 (creative) なものである」(Dana, 1996, p. 189) と結論づけている。長年の研究や思索を経て、かれは、TAT にあっては、形式化された解釈手続きを追いつめるよりは、実務家がそれぞれ臨床的な直感を洗練しつつ、独自の解釈を「創造する」ことに意義があるという結論に到達したようである。

冒頭でも述べたように、わが国の臨床現場では、もっぱらロールシャッハ検査が重用され、TAT は敬遠されてきた。1990 年代に入っても、山本 (1992, p. 2) が嘆いたように、「ロールシャッハ図版は……手あかにまみれているのに対し、TAT 図版のケースにはうっすらとほこりがついている」という状況は、大きくは変わっていない。

ところが、一部の研究者や若手の実務者らは、手あかにまみれるほど多用され、しかも「何々式」といった解釈法が定式化されたロールシャッハ検査に飽きたらなくなってきた。かれらは、被験者のさまざまな心的内容を賦活させやすく、しかも創造的な解釈が求められる TAT という検査の面白味を改めて認識するようになってきた。鈴木 (1991, p. 215) がいうように、TAT には「未開拓な部分がたくさんあり、それだけに研究してみてもおもしろい技法である」。そうしたことが再認識され、若い実務者や研究者らは自分なりの興味関心から、TAT を使いこなそうとし始めた。

1990 年代に入り、わが国でも、ベテラン、中堅、若手の学者らによる新しい TAT の解説書や事例集が刊行され始めた。例えば、わが国の代表的な TAT 研究者である安香 (1990, 1992) は、これまでの豊富な臨床経験を傾注し、TAT 解釈についてのかれの到達点をまとめ上げた。かれはまた、若手・中堅の実務者らとともに、わが国で初めての TAT 解釈事例集を刊行するに至った (安香・藤田編, 1997)。

同じく、TAT 研究を長く続けてきた山本 (1992) も、この時期に、「かかわり分析」と名づける独自の解釈法を世に問うている。かれによれば、かかわり分析とは「TAT 物語そのものの世界に……飛び込んでいくこと」であり、「小説の中に作家の最も essential なものがある (のと同様に)……TAT 物語そのものの中に語り手のさまざまな本質的な構造がある」(山本, 1992, pp. 1-2) との見地から、共感的・直観的解釈をきわめて重視する。かれはまた、TAT を受検するという体験そのものが、被験者にとって、自己を見つめるきっかけになるという点を強調し、TAT 施行後のフィードバック面接 (フィードバック TAT) の治療的意義と効用を強調する。

赤塚・豊田 (1996) は、Westen (1991) らによる対象関係論的 TAT 解釈の方法を紹介しつつ、境界例などの症例においては TAT が被験者の対象関係や社会的認知を把握する好個の

技法であると述べている。

鈴木（1997）は、数百例に及ぶ TAT 反応を収集し、それら多くの反応を独自の視点から分類し、図版それぞれについての反応分類表を作成した。かれは、TAT の解釈とは、そうした反応分類を踏まえた上での「直感法」であるほかないと述べ、各図版ごとに、生ずる可能性のあるさまざまな反応のパターンを丹念に分類しつつその意味づけを考察し、TAT 解釈の道筋を周到に考察している。かれの反応分類表は、TAT を解釈する際に常に参照すべき貴重な道しるべともいえる業績である。

こうした新しい研究動向は、犯罪非行臨床の実務家にとって、大きな刺激となった。1990 年代に入り、主として矯正施設の若手・中堅の心理技官らによる独自の TAT 研究が活発になされるようになってくる。

斉藤俊ほか（1990）は、若年成人の男子受刑者 51 名を対象として、場面設定的教示法の効果を検証している。場面設定的教示法とは、1 図で「いやいやバイオリンを習わされている」、3 BM 図で「悲しい知らせを聞いて混乱している」、4 図で「浮気がばれて、問いつめられている」、6 BM 図で「言うことを聞かないなら、出ていけと言われている」といったストレスフルな場面設定をあらかじめ教示した上で反応を求める技法のことである。斉藤俊ほかによれば、通常の教示では無難な反応で終わることも多い被験者に対し、ストレスフルな場面をあえて設定する教示を与える方が、被験者の問題解決の様式を探る上で有効である。こうした場面設定的教示を試行してみたところ、犯罪者の多くは、間に合わせ的な安易な「偽解決」によってストレス状況を回避しようとしがちであることが分かり、ここにかれらの問題性が明らかに示されたという。

その後、斉藤俊ら（斉藤俊・木村，1991；斉藤俊，1992）は、犯罪者や非行少年らを対象とし、かれらの問題解決様式の特徴を TAT を通して考究した。その結果、(1) 若年成人犯罪者らは、仕事場面では一時的・表面的な解決を図りがちであり；(2) 交友場面では反社会的な行動で解決を図ろうとし；(3) かつ家族関係や異性関係においては、その場しのぎで、他者依存的・状況依存的な解決を図りがちであることが見出されたと報告している。斉藤俊（1993, 1884）はまた、犯罪者や非行少年の対人関係の捉え方を TAT を用いて事例研究的に考察している。かれらは、(1) 劣等感が強く；(2) 自我が脆弱で；(3) 対人場面で敵意を抑圧したり、拒否的・警戒的になったり、あるいは引きこもりがちになりやすく；(4) 課題解決にあたっては、他者依存的で、主体性に乏しく、場当たりの一時しのぎ的な対応を示しやすいことが明らかになったという。

石川・斉藤文（1992）は、犯罪者に TAT を施行すると、1 図においてしばしばバイオリン損傷の主題が出現することに着目し、殺人事件や業務上過失致死事件を起こした犯罪者 3 例のバイオリン損傷の物語を分析している。それによれば、バイオリンを「壊す」か「壊れる」かのちがい、あるいは壊れたバイオリンを前に「途方にくれる」、「修理に出す」、「親に修理してもらおうとする」といった解決様式の相違が、被験者の攻撃性の態様や攻撃衝動の統制力を鑑別するため

の手がかりになることが例証され、また、父親・母親像を探る手がかりにもなることが示唆されている。

石川・齊藤文の研究に刺激され、少年鑑別所に勤務する外川らのグループ（外川・神門・谷口，1993；外川・鈴木，1994；外川，1995）は、バイオリン損傷の主題を語る非行少年らの研究を集積し、次のことが見出されたと報告する。バイオリン損傷を語る非行少年は、(1) 親からの無視や拒否を強く感じている；(2) 自己評価が低い；(3) 否定的自己像を抱く；(4) 無力感を抱く；(5) 課題解決にあたって、依存的・受け身的になりやすい。また、親からもらったバイオリンを「壊した」とする者は、自我防衛的な構えが弱く（MJPI 人格目録における Li 尺度の得点が低い）、超自我機能が比較的健全であるが、他方、バイオリンが「壊れた」とする者は、父親不在の環境で生育し、超自我機能が不全であることが考えられるとした。外川らはまた、「壊した」という物語は、父親に対する自立の主張でもあり、エディパル水準の葛藤と関係するが、「壊れた」という物語は、分離不安やきわめて不安定な母子関係を示唆するものであり、プレ・エディパル水準の挫折と関係すると考察している。さらにまた、非行少年の場合、バイオリン損傷の主題（特に、「壊す」という主題）は、必ずしも自己損傷感のサインではなく、むしろこれまでの自分を壊して再生する、あるいは親から与えられたものを破棄して自分のものを創るといった、望ましい自立への動きを反映することもあり、順調な自我発達のサインでもありえることを示唆としている。

齊藤文（1991，1995 a）は、非行少年における攻撃性の質や強さを TAT を用いて鑑別判定するための着眼点を明らかにしようと試みている。かれは、攻撃的空想を 5 種類に分類する（天変地異や戦争などの途方もない破壊や攻撃、自殺・殺人・事故死などの生命への攻撃、暴行などの身体的攻撃、ものの破壊、敵意や怨恨などの攻撃的感情）とともに、衝動統制の指標（図版認知、思考過程、自己像、超自我の態様、防衛機制）を提示する。その上で、それぞれの少年の語る攻撃的空想の内容とその少年の衝動統制力を複眼的な視点から吟味することで、攻撃性の態様と非行行動との関係についての理解が深まることを論じている。

齊藤文（1992，1995 b）はまた、犯罪非行臨床においてしばしば遭遇する「冷情性反応」（8 BM 図における、生体解剖、拷問殺害、死体陵辱などの物語）に注目し、この種の反応を生じた 21 例の非行少年の事例（男子 17 例，女子 4 例）を収集して、「冷情性反応」の意味を次のように考察した。(1) 本件非行として、男子の場合は、重大な凶悪犯，性犯罪，放火などが含まれる；(2) 女子の場合は，粗暴犯又は攻撃的財産犯が含まれる；(3) いわゆる粗暴犯常習者ではなく，特異な攻撃行動を「爆発」させるタイプが多い；(4) 知能の劣位とは関係がなく，むしろ知的には優れている事例もある；(5) 必ずしも狭義の精神障害のサインではない；(6) しかし，冷情性反応の背後には，適切な防衛機制の破綻，一次過程の思考の優勢，人間的感情や共感性の鈍麻，人格形成の歪みなどが考えられ，精神分裂病や境界性人格障害の心性にも通じるものがある；(7) 冷情的攻撃空想は，外界や他者に対する強い敵意，怨恨，復讐などを意味すると解される；(8) ほ

とんどの事例が、両親の離婚、親との離別、家庭内での虐待などを体験しており、過酷な幼児期を過ごしたと思われる者が多い；(9) そうした生育環境上の負因が、偏りの大きな人格の形成に関連していると考えられる。

齊藤文（1994, 1995 a, 1996 a, 1996 b）はまた、TATを用いて精神病や神経症を鑑別査定する際の着眼点や手がかりをまとめ上げ、TATも病態水準の鑑別にある程度有効であることを論じている。

石川と齊藤文（齊藤文・石川, 1991；石川・齊藤, 1993, 1994, 1995）は、尊属殺人犯、二人以上を殺害した殺人犯、女性殺害、母親殺しなど、さまざまなタイプの殺人犯人のTAT事例を継続的に研究している。事例研究であるため、あまり一般化はできないが、尊属殺人犯のTATには「落下」や「死」の主題が多く、未来を欠いた物語が多く、自己損傷感、低い自己評価、危機や葛藤からの逃避願望、現実との接触の弱さなどが認められるという。二人以上を殺害した殺人犯のTATにおいては、攻撃や死にまつわる主題が多く、認知歪曲が著しいこと、攻撃性が外界に投射され、周囲が自分を苦しめるという被害的な認知をしていること、防衛機制としては自我分裂、空想化、現実否認が用いられることなどを報告している。

また、母親殺害犯人にあっては、未分化な男性同一性、母子の分離不全などが見出されたとする。母親殺害犯人にあっては、幼児的な空想性が強く、自我境界が弱く、誇大かつ万能な自己像を抱くこと、防衛機制としては、理想化や価値下げといった原始的なものが用いられていることなどを指摘し、過酷な母子分離体験や外傷体験がうかがわれるとしている。女性殺害犯人にあっては、口唇攻撃的な物語が語られ、性別同一性の未分化、損傷された自己像と魔術的・万能的な自己像の並存がうかがえるという。殺された恋人（女性）は母親の代理であり、自分を見捨てた恋人への強い依存と敵意は、もともと母親へ向けられていた鬱屈した感情でもあったと解釈できるという。

石原・児玉（1991）は、初入の男子受刑者50名を被験者として、TAT図版に投影される自己イメージ、父親・母親イメージを探った。その結果によれば、

- (1) 自己イメージに近いものは、1図（課題に取り組む自己）、13B図（孤独な自己、又は子ども時代のなつかしい自己）、20図（寂寥感と孤独感を抱く自己）；
- (2) 父親イメージに近いものは、7BM図（理想的・権威的父）；
- (3) 母親イメージに近いものは、8GF図（理想化された女性としての母）、6BM図（支配的な母）、5図（禁止的・監督者的な母）

などであるという。また、TATを通して犯罪者の語る自己像は、人からばかにされ、傷つけられた自己像であることが多く、自己嫌悪感や自信喪失感を伴っていることが見出されたという。

宇都宮（1993）は、非行少年のバウム・テストにおける「切り株・枯れ木・切り取られた枝・幹の傷」は、父母の離婚体験、家庭に対する不満、不遇感、疎外感、劣等感と解釈できるとした上で、切り株を描いた16歳の女子非行少年のTATを分析している。この事例は、1歳で父母

が離婚し、その後、父親、乳児院、養護施設、里親、児童相談所一時保護、養護施設などを転々として生育した事例であるが、その TAT では 17 枚中 11 枚に死の主題が出現し、1 図のバイオリンは壊れており、8 BM 図では「死体をぐちゃぐちゃにして、いい気持ち」という冷情性反応が語られた。TAT から、暖かい母子関係や人間関係体験の欠如、挫折感や見捨てられ感の強さが示唆され、切り株のパウムと TAT 反応の間には深い関連が見出されたという。

熊本・大原・内藤（1994）は、少年鑑別所に 3 度入所した少年の 2 入時及び 3 入時の TAT を分析し、共通して認められるのは、気分の暗さ、挫折感、無力感であり、3 入時の TAT と 2 入時の TAT を比べると、否定的な自己イメージがより強くなり固定化していること、物質的・金銭的な欲求が強くなっていることなどが認められたとした。かれらは、TAT を通して、不適応の深まりや非行反復の心理機制がより深く理解されたとしている。

表 4 わが国の犯罪非行臨床における TAT 研究文献（1990 - 1998 年）

研 究 者	年 次	論 文 題 目
齊藤俊ほか	1990	TAT による問題解決様式のとらえ方について
齊藤文	1991	TAT 反応における攻撃性についての一考察 —いくつかの事例を通して—
齊藤文・石川	1991	尊属殺人犯の TAT
齊藤俊・木村	1991	TAT による問題解決様式のとらえ方について、その 2
石原・児玉	1991	犯罪者とストレス、その V：TAT 図版に投影された自己イメージから
齊藤俊	1992	TAT による問題解決様式のとらえ方について、その 3
石川・齊藤文	1992	マレー版 TAT の I カードにおいてバイオリンに象徴される自己像について
齊藤文	1992	マレー版 TAT の 8 BM 図におけるいわゆる冷情性反応について、その 1
宇都宮	1993	屈折体験と樹木画、その III：TAT を通してみた場合
石川・齊藤文	1993	複数の殺人を犯したただ単に受刑者の TAT：その攻撃性、防衛、自己像
外川・神門・谷口	1993	TAT の I カードにおけるバイオリン損傷テーマについて
齊藤俊	1993	TAT による対人関係のとらえ方について
外川・鈴木	1994	TAT の I カードにおけるバイオリン損傷テーマについて、その 2
齊藤文	1994	臨床場面における TAT 解釈の手がかり、その 1
齊藤俊	1994	TAT による対人関係のとらえ方について、その 2
熊本・大原・内藤	1994	少年鑑別所に再入した少年の TAT 反応
石川・齊藤文	1994	女性を殺害した男性受刑者の TAT：その女性像、自己像、攻撃性
齊藤哲・齊藤文	1994	TAT のコラージュ的利用の試み、その 1
齊藤文	1995 a	TAT による非行少年の攻撃性に関する一考察
齊藤文	1995 b	TAT の 8 BM 図において冷情的攻撃空想を語る非行少年の諸特徴
齊藤文	1995 c	臨床場面における TAT 解釈の手がかり、その 2
浦田	1995	TAT 反応に見られる性誤認について
外川	1995	TAT の I カードにおけるバイオリン損傷テーマについて、その 3
浜井	1995	TAT に現れた少年院の処遇効果について
石川・齊藤文	1995	TAT を通して母親殺害者の心理を考える
石川・齊藤文	1996	TAT を通して女性を殺害した男性の心理を考える
齊藤文	1996 a	不安神経症及びヒステリー神経症の鑑別診断のための TAT 解釈指標：臨床場面における TAT 解釈の手がかり、その 3
齊藤文	1996 b	強迫神経症の鑑別診断のための TAT 指標：臨床場面における TAT 解釈の手がかり、その 4
齊藤文	1997 a	幼児わいせつを犯した非行少年 2 事例の TAT 反応についての一考察
齊藤文	1997 b	強制わいせつ非行少年の TAT 反応の特徴に関する一考察
齊藤文・浦田	1998	マレー版 TAT 図版の起源についての一考察：Morgan 論文の翻訳に基づいて

斉藤哲・齊藤文（1994）は、健常な成人を被験者とし、通常の教示でTATを施行した後、TAT図版の原寸大コピーを持ち帰らせ、それを用いてコラージュ作品を創らせた事例を報告する。そのコラージュを手がかりに、より多面的なTAT解釈が可能であることを論じ、TAT反応が創作物語であるとすれば、コラージュ作品はその物語のイラスト化あるいは視覚化であるとして、TATコラージュ法を提唱している。

浜井（1995）は、女子少年院の短期過程に収容された女子非行少年12名に、入院時及び出院時にTATを施行した結果を報告している。それによれば、出院時には、1図や3BM図において再生ややり直しの主題が語られることが多く、少年院での体験がいわば幼児期のやり直し体験であったことが示され、TATで測定される変化が処遇効果を見るための有用な手がかりになることを論じている。また、TATで変化が認められない事例では、処遇上の成長や変容も乏しかったという。

浦田（1995）は、非行少年を対象としたTATでは、3BM図、8BM図、10図、12M図、15図などで、しばしば性別誤認や性別認知の混乱が見られることを取り上げ、TATにおける性別誤認が生じるのは、(1)身体特徴や衣服への無関心や偏った認知；(2)状況把握の偏り；(3)場面把握のあいまいさ、不適切さ、などによるものであって、性別誤認は、(少年の場合には)必ずしも同性愛傾向を示唆するものではなく、むしろ生育環境の影響による性役割の混乱や、性役割意識の欠如を示すと解すべきことを論じた。

第6節 まとめと要約

わが国の犯罪非行臨床におけるTAT研究を、4期に分けて概観した。

第1期（1950年代から1960年代）：TAT図版がハーバード大学から出版されたのは1943年であるが、TAT技法がわが国に移入され、TATに関する研究が始まるのは、1950年代初頭以後のことである。このころ、アメリカにおけるTAT研究はきわめて活発であった。それに呼応して、わが国でもTATの草分け的な研究が始まる。わが国においては、そうした研究の最早期から、犯罪非行臨床でのTAT研究が始められた。

第2期（1970年代）：ロールシャッハ・テストにおけるサイン・アプローチの研究が飛躍的に発展する一方で、TATにおいては、客観的・標準的な分析手続きと解釈方式がついに確立することはなかった。また、TAT反応は無意識の心的内容というよりも知的な課題解決能力の産物であるといった批判が提起され、投影法としてのTATの基本的な性格についての疑義が高まった。そうしたことの結果、TATは、使い勝手の悪い、魅力の乏しい心理検査として、次第に敬遠されるようになった。しかし、わが国の犯罪非行臨床では、この時期においても、いくつかの地道な研究が継続されていた。

第3期（1980年代）：TAT研究が、内外ともに最も低調になった時期である。しかし、わが

国の犯罪非行臨床の分野では、安香や坪内らによる精力的な実務研究が続けられた。そうした研究の成果が坪内によってまとめられ、1984年に「TAT アナリシス」と題する解釈手引書が刊行された。

第4期（1990年代）：1990年代に入り、アメリカでも日本でも、新しいTAT研究者が輩出し、TAT研究が再び活性化してきた。犯罪非行臨床でも、TATの面白さが見直され、主として矯正施設に勤務する若手ないし中堅の心理技官らによる研究が活発化した。論文としてまとめられたものは多くないが、かれらは、犯罪心理学会などの場で、独自の観点からの実務研究を発表している。攻撃性の測定、性別誤認の意味、自己像・父母像の投影、切り株バウムとTAT、少年院の処遇効果の測定、1図の「壊れたバイオリン」、8BM図の「冷情性空想」、対人関係様式や課題解決様式、殺人者の事例研究など、犯罪非行臨床ならではの研究テーマが考究され始めた。また、矯正臨床の実務者であった安香・藤田らによって、「臨床事例から学ぶTAT解釈の実際」と題する解釈事例集が刊行された。

引用文献

- 赤塚大樹・豊田洋子 1996 心理検査によるアセスメントの実際 赤塚大樹ほか著 心理臨床アセスメント入門 pp.79-130. 培風館.
- 安香 宏・佐藤 寛 1962 少年非行の早期予測に関する研究：TATによる研究 法務総合研究所編 法務総合研究所研究部紀要 pp.29-44. 法務省.
- 安香 宏・坪内順子 1968 TATの分析法と解釈基準の検討——刺激認知と物語構成の特徴からみた——臨床心理学研究, 7(1), pp.1-14.
- 安香 宏・坪内順子 1969 a TAT反応の病理学的考察 第5回日本臨床心理学会発表論文集 pp.140-141.
- 安香 宏・坪内順子 1969 b 精神分裂病者のTAT反応に見られる記述反応の特徴 臨床心理学の進歩 pp.113-122. 誠信書房.
- 安香 宏 1976 空想の分析——TAT解釈のプロセスをめぐって—— 大原健士郎・岡堂哲雄編 現代人の異常性（現代のエスプリ別冊） pp.66-90. 至文堂.
- 安香 宏 1990 TAT 土居健郎ほか編 異常心理学講座第8巻：テストと診断 pp.119-169. みすず書房.
- 安香宏 1992 TATの分析・解釈技法をめぐって 安香宏・大塚義孝・村瀬孝雄編 臨床心理学大系第6巻：人格の理解（その2） pp.53-88. 金子書房.
- 安香 宏・藤田宗和編 1997 臨床事例から学ぶTAT解釈の実際 新曜社.
- Bailey, B. and Green, J. 1997 Black Thematic Apperception Test stimulus material. Journal of Personality Assessment, 41, pp.25-30.
- Bellak, L. 1993 The TAT, CAT, and SAT in clinical use, the 5th edition. Boston: Allyn and Bacon.
- Brittain, H. L. 1907 A study in imagination. The Pedagogical Seminary, 14, pp.137-207.
- Cramer, P. 1996 Storytelling, narrative and the Thematic Apperception Test. New York: Guilford Press.
- Dana, R. H. 1996 The Thematic Apperception Test. In C. S. Newmark (Ed.), Major psychological assessment instruments, the 2nd edition. Boston: Allyn and Bacon.

- Eron, L. D. 1950 A normative study of the Thematic Apperception Test. Psychological Monographs, 64 (9), Whole No. 315.
- Frank, L. K. 1939 Projective methods for the study of personality. Journal of Psychology, 8, pp. 389-413.
- 藤掛 明・荒井裕子 1987 TATによる非行少年の家族認知の分析 犯罪心理学研究, 25, 特別号, pp. 70-73.
- 藤田幸子 1961 TATに現れた女子非行少年の態度：ホーナイ理論による新しい非行類型の試み 調研紀要, 1 (創刊号), pp. 135-145.
- 藤田裕司 1984 非行少年における母子病理——TATでとらえたその諸相—— 犯罪心理学研究, 22 (1), pp. 1-14.
- 藤戸せつ 1959 非行少年 戸川行男ほか監 心理診断法双書：TAT pp. 255-267. 中山書店.
- 郷古英男 1980 a 心理診断の技法——TATの施行と解釈の技法——(第1部) 調研紀要, 37, pp. 1-21.
- 郷古英男 1980 b 心理診断の技法——TATの施行と解釈の技法——(第2部) 調研紀要, 38, pp. 25-66.
- 浜井浩一 1995 TATに現れた少年院の処遇効果について 犯罪心理学研究, 33, 特別号, pp. 24-25.
- Harrison, R. 1965 Thematic Apperception Methods. In B. B. Wolman (Ed.), Handbook of clinical psychology. pp. 562-620. New York: McGraw-Hill.
- 市川定三編 1972 矯正のためのテストと統計 大阪矯正管区文化会.
- 伊井尚子・小川モモ子 1975 TATからみた長期施設収容少年の自己同一性 犯罪心理学研究, 12, 特別号, pp. 20-21.
- 稲森晃一・小林 剛 1989 TATの図版特性に関する研究 犯罪心理学研究, 27, 特別号, pp. 132-133.
- 石原慶子・児玉昌久 1991 犯罪者とストレス(V)——TAT図版に投影された自己イメージから—— 犯罪心理学研究, 29, 特別号, pp. 82-83.
- 石川卓磨・齊藤文夫 1992 マレー版TATの1カードにおいてバイオリンに象徴される自己像について 犯罪心理学研究, 30, 特別号, pp. 130-131.
- 石川卓磨・齊藤文夫 1993 複数の殺人を犯した受刑者のTAT——その攻撃性, 防衛, 自己像—— 犯罪心理学研究, 31, 特別号, pp. 98-99.
- 石川卓磨・齊藤文夫 1994 女性を殺害した男性受刑者のTAT——その女性像, 自己像, 攻撃性—— 犯罪心理学研究, 32, 特別号, pp. 16-17.
- 石川卓磨・齊藤文夫 1995 TATを通して母親被害者の心理を考える 犯罪心理学研究, 33, 特別号, pp. 54-55.
- 石川卓磨・齊藤文夫 1996 TATを通して女性を殺害した男性の心理を考える 日本心理臨床学会第15回発表論文集, pp. 312-313.
- 磯貝嘉代子 1961 非行少年のTAT反応の量的考察 調研紀要, 1 (創刊号), pp. 59-82.
- 貝沼良行 1960 事故運転者の臨床心理学的考察I 科学警察研究所報告(交通編), 1 (創刊号)(1), pp. 128-134.
- 貝沼良行 1960 事故運転者の臨床心理学的考察II 科学警察研究所報告(交通編), 2 (1), pp. 56-62.
- 笠井高行ほか 1972 TAT分析からみた罪種別非行少年の内的世界の比較研究 調研紀要, 22, pp. 89-106.
- 木村 駿 1964 TAT診断法入門 誠信書房.
- 木村 駿 1989 マレーの欲求・圧力論 本明 寛編 性格心理学講座第1巻：性格の理論 pp. 123-136. 金子書房;
- 小嶋謙史四郎 1969 TAT 片口安史ほか編 臨床心理学講座第2巻：人格診断法 pp. 137-167. 誠信書

- 房.
- 熊本八重・大原照代・内藤ゆか 1994 少年鑑別所に再入した少年の TAT 反応 犯罪心理学研究, 32, 特別号, pp. 14 - 15.
- Libby, W. 1908 The imagination of adolescents. American Journal of Psychology, 19, pp. 249 - 252.
- Lindzey, G., Bradford, J., Tejesy, C. and Davids, A. 1959 Thematic Apperception Test: An interpretive lexicon for clinician and investigator. Journal of Clinical Psychology, Monograph Supplement, No. 12.
- 丸井文男・関根忠直・近藤信義 1959 犯罪者 戸川行男ほか監 心理診断法双書: TAT pp. 268 - 275. 中山書店.
- Morgan, C. D. and Murray, H. A. 1935 A method for investigating fantasies: The Thematic Apperception Test. Archives of Neurology and Psychiatry, 34, pp. 289 - 306.
- 森 武夫 1976 吉尾ケース: 少女に強姦を繰り返した加害者の心の軌跡 調研紀要, 30, pp. 90 - 109.
- 村瀬嘉代子 1989 TAT 技法指導 調研紀要, 55, pp. 1 - 33.
- Murray, H. A. 1938 Explorations in personality. New York: Oxford University Press. 外林大作訳編 1961 パーソナリティ I, II 誠信書房.
- Murstein, B. I. 1963 Theory and research in projective techniques: Emphasizing the TAT. New York: Wiley.
- Murstein, B. I. 1972 Normative written TAT responses for a college sample. Journal of Personality Assessment, 36, pp. 109 - 147.
- 中村好子 1965 いわゆる「性格不一致」夫婦とのとり組み方 —— TAT かかわり分析を手懸かりとして —— 調研紀要, 8, pp. 35 - 47.
- 小田 晋 1963 TAT (絵画統覚検査) による多種方向犯罪者の研究(I) —— 全体的特徴 —— 犯罪学雑誌, 29, pp. 173 - 183.
- 小川モモ子・伊井尚子 1975 TAT からみた長期施設収容少年の自我同一性, その 2 犯罪心理学研究, 12, 特別号, pp. 21 - 22.
- 小川俊樹・田辺 肇・伊藤宗観 1997 わが国における臨床心理検査の現状 日本心理臨床学会第 16 回大会 発表論文集, pp. 116 - 117.
- Piotrowski, C., Sherry, D. and Keller, J. W. 1985 Psychodiagnostic test usage: A survey of the Society for Personality Assessment. Journal of Personality Assessment, 49, pp. 115 - 119.
- Polyson, J., Norris, D. and Ott, E. 1985 The recent decline in TAT research. Professional Psychology: Research and Practice, 16, pp. 26 - 28.
- 齊藤文夫・坪内順子・安香 宏 1975 TAT による特殊犯罪者(病的な人格反応である犯罪)の研究, II 犯罪心理学研究, 12, 特別号, p. 41.
- 齊藤文夫 1979 ある殺人犯の TAT 事例 河合隼雄ほか編 臨床心理ケース研究第 2 巻, pp. 189 - 204. 誠信書房.
- 齊藤文夫 1991 TAT 反応における攻撃性についての一考察 —— いくつかの事例を通して —— 犯罪心理学研究, 29, 特別号, pp. 76 - 77.
- 齊藤文夫・石川卓磨 1991 尊属殺人犯の TAT 犯罪心理学研究, 29, 特別号, pp. 78 - 79.
- 齊藤文夫 1992 マレー版 TAT の 8 BM 図におけるいわゆる冷情性反応について, その 1 犯罪心理学研究, 30, 特別号, pp. 132 - 133.
- 齊藤文夫 1994 臨床場面における TAT 解釈の手がかり(その 1) 追手門学院大学文学部紀要, 30, pp. 69 - 86.
- 齊藤文夫 1995 a TAT による非行少年の攻撃性に関する一考察 犯罪学雑誌, 61, pp. 235 - 247.

- 齊藤文夫 1995 b TAT の 8 BM 図において冷情的攻撃空想を語る非行少年の諸特徴 犯罪心理学研究, 33 (1), pp. 29 - 40.
- 齊藤文夫 1995 c 臨床場面における TAT 解釈の手がかり(その 2) 追手門学院大学人間学部紀要, 1 (創刊号), pp. 23 - 34.
- 齊藤文夫 1996 a 不安神経症及びヒステリー神経症の鑑別診断のための TAT 解釈指標 —— 臨床場面における TAT 解釈の手がかり(その 3) —— 追手門学院大学人間学部紀要, 2, pp. 61 - 79.
- 齊藤文夫 1996 b 強迫神経症の鑑別診断のための TAT 指標 —— 臨床場面における TAT 解釈の手がかり(その 4) —— 追手門学院大学人間学部紀要, 3, pp. 23 - 34.
- 齊藤文夫 1997 a 幼児わいせつを犯した非行少年 2 事例の TAT 反応についての一考察 追手門学院大学人間学部紀要, 4, pp. 15 - 34.
- 齊藤文夫 1997 b 強制わいせつ非行少年の TAT 反応の特徴に関する一考察 追手門学院大学人間学部紀要, 5, pp. 17 - 38.
- 齊藤文夫・浦田 洋 1998 マァレー版 TAT 図版の起源についての一考察: Morgan 論文の翻訳に基づいて 追手門学院大学人間学部紀要, 6, pp. 29 - 52.
- 齊藤哲也・齊藤文夫 1994 TAT のカラージュ的利用の試み(その 1) 犯罪心理学研究, 32, 特別号, pp. 172 - 173.
- 齊藤俊郎・佐藤比呂明 1989 TAT からとらえる適応力の変化について —— 非行少年を対象として —— 犯罪心理学研究, 27, 特別号, pp. 134 - 135.
- 齊藤俊郎・今村洋子・和田弘子・浅野寛之・羽間平人 1990 TAT による問題解決様式のとらえ方について —— 問題解決場面を設定することの効果の検討 —— 犯罪心理学研究, 28, 特別号, pp. 4 - 5.
- 齊藤俊郎・木村隆一 1991 TAT による問題解決様式のとらえ方について(その 2) 犯罪心理学研究, 29, 特別号, pp. 80 - 81.
- 齊藤俊郎 1992 TAT による問題解決様式のとらえ方について(その 3) 犯罪心理学研究, 30, 特別号, pp. 128 - 129.
- 齊藤俊郎 1993 TAT による対人関係のとらえ方について 犯罪心理学研究, 31, 特別号, pp. 102 - 103.
- 齊藤俊郎 1994 TAT による対人関係のとらえ方について(その 2) 犯罪心理学研究, 32, 特別号, pp. 12 - 13.
- 佐治守夫 1963 TAT 井村恒郎監 臨床心理検査法 pp. 198 - 234. 医学書院
- 逆瀬川幸雄 1973 非行少年に対する TAT の適用 調研紀要, 23, pp. 119 - 124.
- 佐野勝男・横田 仁 1958 精研式主題構成検査 (TAT) の評価方法 精神医学研究所.
- 沢井俊恵ほか 1980 非行少年における男性性・女性性についての考察 調研紀要, 38, pp. 1 - 24.
- Schwartz, L. A. 1932 Social situation pictures in the psychiatric interview. American Journal of Orthopsychiatry, 2, pp. 124 - 132.
- Scodel, A. and Lipetz, M. E. 1957 TAT hostility and psychopathology. Journal of Projective Techniques, 21, pp. 161 - 165.
- Stone, H. 1956 TAT aggressive content scale. Journal of Projective Techniques, 20, pp. 445 - 452.
- 鈴木睦夫 1986 TAT 解釈に関する一提言と公表された一解釈例の批判的検討 中京大学文学部紀要, 21 (2), pp. 173 - 198.
- 鈴木睦夫 1988 TAT 解釈の一例(1) —— シンナー乱用少年の事例 —— 中京大学文学部紀要, 23 (1), pp. 1 - 29.
- 鈴木睦夫 1991 投影法(2): TAT 河合隼雄ほか監 臨床心理学第 2 巻: アセスメント pp. 203 - 215. 創元社.
- 鈴木睦夫 1997 TAT の世界: 物語分析の実際 誠信書房.
- Teglassi, H. 1993 Clinical use of storytelling: Emphasizing the TAT with children and adolescents.

齊藤：わが国の矯正臨床における TAT 研究の歴史と動向

- Boston: Allyn and Bacon.
- 外川江美・神門一途・谷口五郎 1993 TAT 1 カードにおけるバイオリン損傷テーマについて 犯罪心理学研究, 31, 特別号, pp.100-101.
- 外川江美・鈴木秀樹 1994 TAT 1 カードにおけるバイオリン損傷テーマについて(2) 犯罪心理学研究, 32, 特別号, pp.10-11.
- 外川江美 1995 TAT 1 カードにおけるバイオリン損傷テーマについて(3) 犯罪心理学研究, 33, 特別号, pp.22-23.
- 戸川行男 1953 TAT 日本版: 絵画統覚検査解説 金子書房.
- 戸川行男ほか監 1959 心理診断法双書: TAT 中山書店.
- Tomkins, S. 1947 The Thematic Apperception Test: The theory and technique of interoperation. New York: Grune and Stratton.
- 坪内順子 1972 TAT 市川定三編 矯正のためのテストと統計 pp.220-245. 大阪矯正管区文化会.
- 坪内順子・齊藤文夫・安香 宏 1975 TAT による特殊犯罪者(病的な人格反応である犯罪)の研究, I 犯罪心理学研究, 12, 特別号, pp.40-41.
- 坪内順子 1979 女性が犯罪に陥る心理的危機の分析——特に中年後期の危機を中心として TAT を用いた分析—— 犯罪心理学研究, 14 (1/2), pp. 1-13.
- 坪内順子 1984 TAT アナリシス 垣内出版.
- 氏原 寛 1980 TAT の解釈例 氏原 寛著 心理臨床の実際 pp.215-238. 誠信書房.
- 浦田 洋 1995 TAT の反応に見られる性誤認について 犯罪心理学研究, 33, 特別号, pp.20-21.
- 宇都宮敦浩 1993 屈折体験と樹木画, そのⅢ——TAT を通してみた場合—— 犯罪心理学研究, 31, 特別号, pp.42-43.
- 我妻 洋 1973 非行少年の事例研究: 臨床診断の理論と実際 誠信書房.
- Westen, D. 1991 Clinical assessment of object relations using the TAT. Journal of Personality Assessment, 56, pp.56-74.
- 山本和郎 1966 TAT——かかわり分析—— 井村恒郎ほか編 異常心理学講座第2巻: 心理テスト pp.95-205. みすず書房.
- 山本和郎 1992 心理検査: TAT かかわり分析 東京大学出版会.

1998年9月30日 受理